

英語が苦手な人は 英単語を「5000語」マスター

篠原隆徳先生
医学部予備校富士学院
福岡校・英語科講師

全部のスペルは
書けなくてもOK!



※品切れ(改訂中)



英単語の
土台が
できたら

「文法」と「読解」も強化!

- 読解力をつけるなら、精読(正確に読む)と速読(速く読む)の2つの力を伸ばそう。お薦めの勉強法は、英語の長文問題集を一冊まるごと、まずは精読(和訳)すること。そのあと一気に、一冊まるごと速読する練習をしよう。すでに意味が理解できているので、スピードを上げて読む練習がしやすい。
- 文法の基礎力がなかったSくんは、中学レベルからやり直し。文法・和訳・英作文がコンパクトにまとまった「パーフェクトコース参考書 わかるをつくる 中学英語」(Gakken)と長文を読むにあたり間違えやすい文法が解説された「スクランブル英文法・語法 4th Edition」(旺文社)を併用し、文法力も磨いた。



「5000語といっても、スペルまで覚えるのは基本の3000語でOKです。医学部受験ならこの難解な単語は意味を覚えるだけで十分です」(篠原先生)

高 校を2年で中退し高卒認定を取ったSくんが、富士学院に相談に来たのは翌年(21年)の冬でした。医師家系で、本人も人の役に立ちたいの思いが強かったのですが、特に英語が苦手な当時の偏差値は40以下。ですが、英語は「語彙力」「文法知識」「読解力」の三つを底上げすれば、絶対に得点できるようにになります。なかでも、語彙力を鍛えることが重要だと篠原先生は言う。

「文章の前年から単語の意味を推測する方法もありますが、当たり前ながら、実際に単語の意味を知っている人には勝てません。一般的に、受験に必要な英単語は3000語といわれていますが、僕は英語が苦手な人ほど、5000語を覚えることをお薦めしています。単語学習の特徴は、上限がないこと。英語の成績が上がってくると、みんな「文法知識」「読解力」が試される問題はある程度点数をとれるようになってくるので、点差がつきづらくなります。そんな受験直前期に周りの点差をつけてくれるのが語彙力。単語を諦めることは医学部を諦めることと常々言っています」

まず夏までの語彙力向上のために使ったのは「英単語ターゲット1900」(旺文社)。1900とあるがcreateという単語はcreativeやcreationなど派生語があり、なかには複数の意味を持つ単語もある。それらも含め、これ1冊で約3000語をマスターする

ことができた。3000語を暗記したSくんは1年目の6月時点で偏差値を58・3まで伸ばした。

「その後は、医学部受験で頻出する単語を集めたオリジナルテキストと、医学部受験にも強い『システム英単語メディカル』(駿台文庫)の併用で、さらに2000語を身につけてもらいました。一気に多くを覚えようとしなくていいので、一度に三つなら絶対に覚えられると指導していました。休み時間などを利用して、1日かけて計20〜25単語を暗記するイメージ。覚えにくいものは付箋などで目印をつけておき、週末に集中的に振り返りを。2周目は、1回で覚える数を増やすといいでしょう。受験当日まではスケジュール的に2周が限界かと思うので、1回で確実に暗記する意識で学習しましょう」

ある程度語彙力を身につけたところで、「文法知識」と「読解力」も並行で強化した。「文法知識」は、あえて中学レベルからやり直し、基礎を理解した。そのうえで、間違えやすい文法がわかりやすく解説された「スクランブル英文法・語法 4th Edition」や富士学院のオリジナルテキスト「英語構文」も使い読解力を強化。

Sくんの偏差値は2年目の6月時点で68・3と入校前から20以上も伸び、最終的に受験した8校すべての1次試験に見事合格。ハードルが高いと本人が感じていた東京医科大学への進学をかなえた。

着実に力をつける! 3段階の「スパイラル学習法」

佐中 笑先生
医学部予備校富士学院
名古屋校・生物科講師

2月 10月 11月 12月 1月



※Mさんが使用していたのは旧課程版

第1ステップ 教科書レベルの内容を理解!

高 1から23歳の春まで、欧州へダッス留学をしていたMさんは、22年2月に富士学院の戸を叩いた。「中高一貫の進学校に通っていたものの高1からブランドがあるため、数学はII相当まで、生物に関してはほぼゼロからのスタートでした。数学は特に苦手意識があり点数も伸びづらかったため、足りない分を補うために生物は偏差値70〜75を目指しました」

そこで佐中先生が提案したのが、段階的に着実に力をつけていく「スパイラル学習法」。受験までの約1年を3つのステップに分けて、基礎から徐々に難易度を上げていく勉強法だ。

第1ステップ(2〜10月)では、教科書レベルの内容を理解し、暗記を固める。そこでMさんにおすすめた教材が、基本が網羅的にわかりやすく掲載されている「もういちど読む数研の高校生物」(数研出版)だ。演習問題が豊富に載った「セミナー生物」(第一学習社)と併用して自習を行った。

「生物で得点をとるのに大切なのは、単語の意味を本質的に理解すること。生物用語の定義は曖昧なものが多く、例えば「ゲノム」は、「個体の形成や生命活動に必要な1組の遺伝情報」や「配偶子に含まれる1組の遺伝情報」と表現されます。問題によって全く異なる書き方がされているので、用語の本質を咀嚼できていないと、問題の意味すら理解できず解答できないのです。

第2ステップ(10月下旬〜12月半ば)では、典型的な類題を数多く解くことで、間違えた箇所の復習を重点的に行いました(Mさんの場合は、富士学院オリジナル教材「実戦問題集」を使用)。このステップを飛ばして過去問を解くと、点数がとれず自信をなくすので、焦らないことが大切。6月の模試で60だったMさんの偏差値は10月に67、11月には69まで上がりました」

第3ステップ(12月半ば〜1月)では、過去問をひたすら解いた。「志望校は最低3年分を解きましょう。Mさんは、第1志望の国際医療福祉大学は6年分、他の志望4校(東北医科薬科大、藤田医科大学、関西医科大学、久留米大)は3年分解き、結果、全ての志望校の1次試験を突破することができました」

第1志望にも補欠合格したものの、最終的に縁を感じた関西医科大学に進んだMさん。自身の経験を胸に「世界で活躍するアスリートを支えたい」と、夢への一歩を踏み出した。

